

# 「学び合う学び」を創る

---

平成27年4月13日（月）  
ひたち野うしく小学校 校内研修

## ペアで支え合いながら学ぶ



同じモノを見ても考  
えることが異なる。  
その違いから学ぶ。

## パートナーの説明から学ぶ



教師の説明よりもパートナーの説明の方がわかりやすい子どももいる。

# 仲間はずれができない 「4人のグループ」



6人グループとの違いは  
全員と隣接していること

## だれも独りにしないためのペア学習



全てのペアと一緒に学ぶようになる  
ことが低学年の最も大切な目標

## ペアからグループへ



ペアの約束（パートナーと学ぶ）



4人グループでより多様で異なる考  
えや説明に触れる（3年生以上）

# モニターすることで学ぶ



質問者と説明者をモニターする子どもも彼ら以上に学んでいる。(聴くことで学ぶ。)

## 資料の「違い」が学びを促す



異なる辞書・資料集・文献などが学びを深める  
きっかけになる



# 「探索」から「探究」へ



Search (探す)



Research (探究する)

## 個が伸びるためのグループ協同学習



必要なときに聴き（訊き）合  
える関係であることが大切。  
あくまで学びの主体は個。

# 必要なときにいつでも 関われる安心感



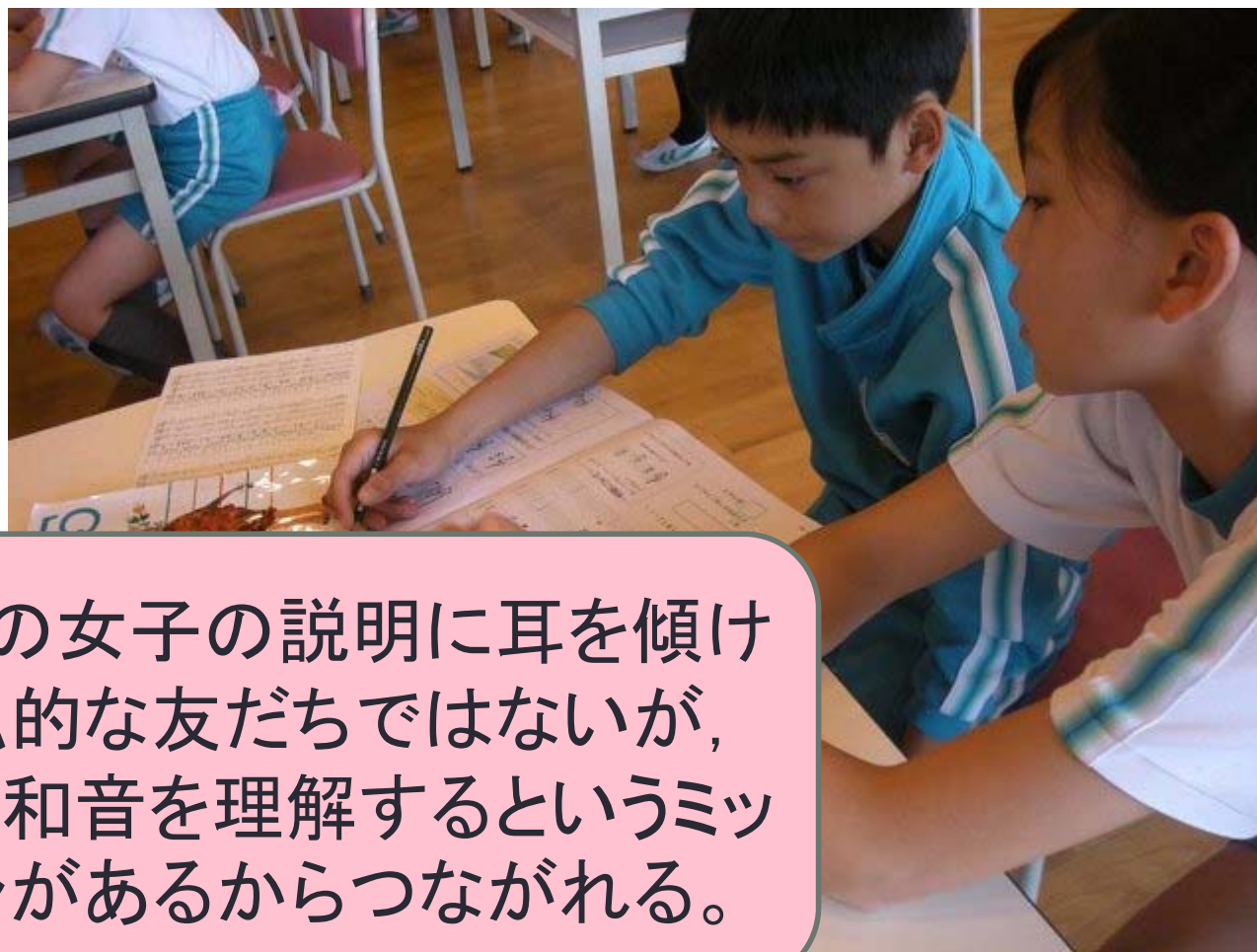
1人にも2人にも  
3人にもなれるの  
が4人グループの  
柔軟なところ。

# 1人の疑問に全員で寄り添う



どう説明したら伝わるかを  
考える時に学びは深まる

## 私的な関係を超えて対等に学ぶ



となりの女子の説明に耳を傾ける。私的な友だちではないが、5度の和音を理解するというミッションがあるからつながれる。

# 1人が話し始めると全員で聴く



この状態ができるまで(ずっと続くように)、  
全ての学級で根気強く求めていきたい。

# 主役は子ども，教師は促進者



黒板や教卓から離れて  
子ども同士を主役にする  
教師のポジショニング

## 発言者をやさしく待てる学級



急かさない，口を挟まない，からかわない。  
静かに待つ，心の中で(がんばれ)と応援する。  
学級経営が授業を支え，授業が学級集団をつくる。



## 対象との自己内対話による学び



ひとりひとりにモノがある。納得するまで自由に見られる。そのような環境をつくれれば、学びから離れる子どもは生まれない。

## コの字形の机配列での個人作業



黒板ではなくモノ・教科書・資料を見ながら学ぶ子どもたち。正面には友だちの学ぶ姿が見える。

## 「わからなさ」で関わりが生まれる



すぐには解決できないレベルの問題に出会う。その時はじめて関わる必要が生まれる。

## 困っている子どもが学びの中心に



わからないと言う子どもを中心に4人が学ぶ。「どうしてそうなるの？」  
「どう説明したら伝わるかな？」

## 3人目の子どもが学ぶ・つなぐ



今はあなたが3人目だよ。一緒に説明をよく聴きながら，付け加えることや違う説明の仕方がないか考えてね。

# 個人作業の協同化(グループで)



課題が明確なら子どもたちで学べる。必要な時だけ関わる。

## 個人作業の協同化(コの字型で)



課題が明確。困った時に堂々と見せてもらえる。次から自分ひとりでできるようになればいい。



# 学校生活の7割は授業

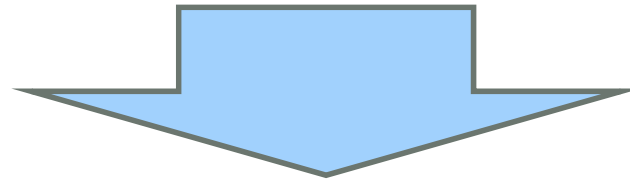
授業はひとりひとりの子ども  
の居場所になっているか





従来から行われている  
「一斉授業」では

- 教師の説明だけでは頭に入らない
- 正解でつなぐ授業からは落ちていく



- わからない, どうしてそうなるの?と言えないまま授業がすすんでいく。



「一斉授業」の限界  
(児童の多様性に対応できない)

「個別指導」の限界  
(1~2名の指導者では対応不可)  
(子どもの尊厳を守りきれない)

•「いつも先生に教えてもらうのは・・・。」



•「もう終わっちゃった。やることないな・・・。」



## 授業づくりの発想の転換

「1人の教師が40人に教える」



「仲間との関係をよくする」

「子どもが仲間の力を借りて学ぶ」

## 基本的な考え方

学びを通してよい人間関係をつくる  
人間関係を築いて学びを保障する

そこで提唱されたのが

グループ協同学習  
(学び合い)

# 学び合いの哲学

「ひとりの子どもも見捨てない」

そのためには、

活動的で協同的な授業を



## これまでの一斉授業

- 教師から児童への知識の伝達
- 「わかりましたか？」
- 「わかった人は発表してください」
- 正解の発表で学習はおしまい

◇ わからない子が埋もれていく  
(私語・離席・離脱・不登校・引きこもり)

## グループ協同学習（学び合い）では

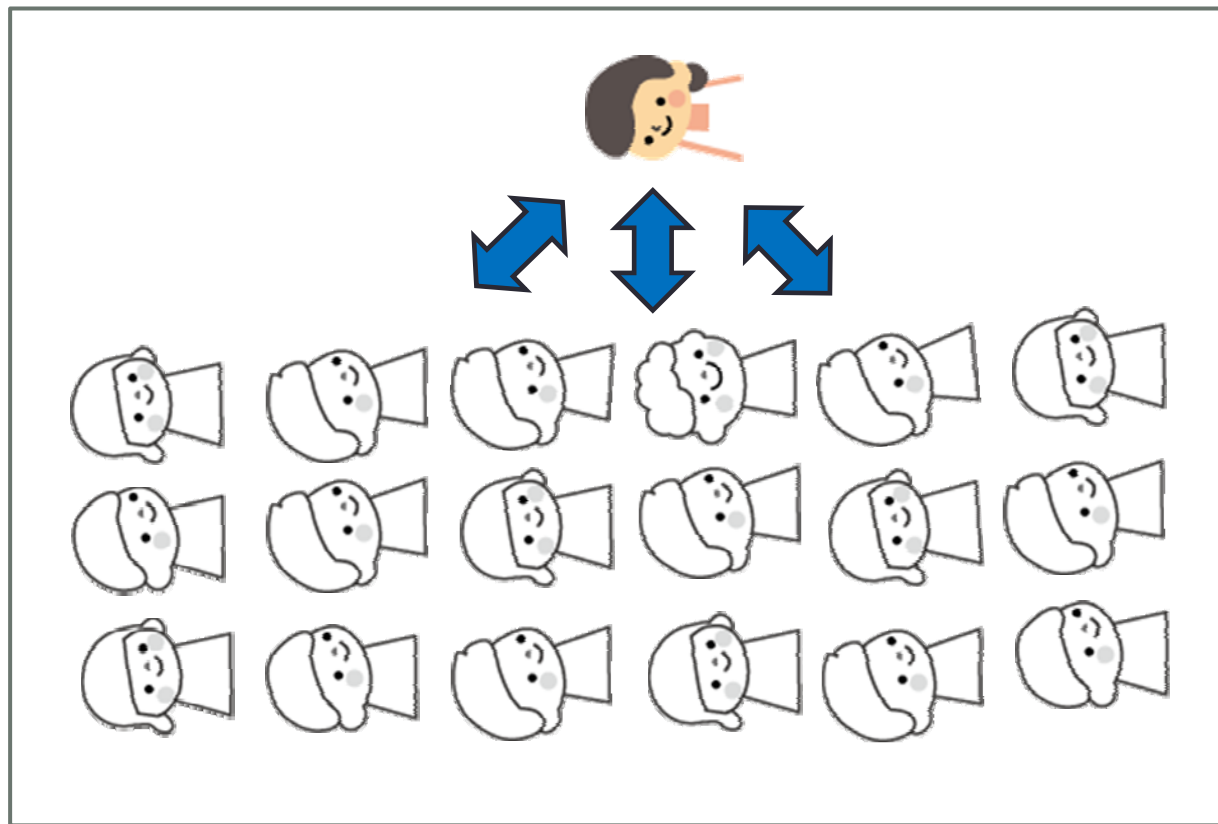
- モノや友だちとかかわりながら
- 考えや疑問を聴き合うこと
- 「どこで困っているの？」
- 「困ったら自分から友だちに訊くんだよ」
- 「わからないこと(人)」から学びが始まる



# 聴き合うための「教室空間」

# スクール形式（一斉指導の教室空間）

◇効率よく知識を伝達するのに適している。



ただし、聴き手がみんな同じ能力や適性をもっていれば…。

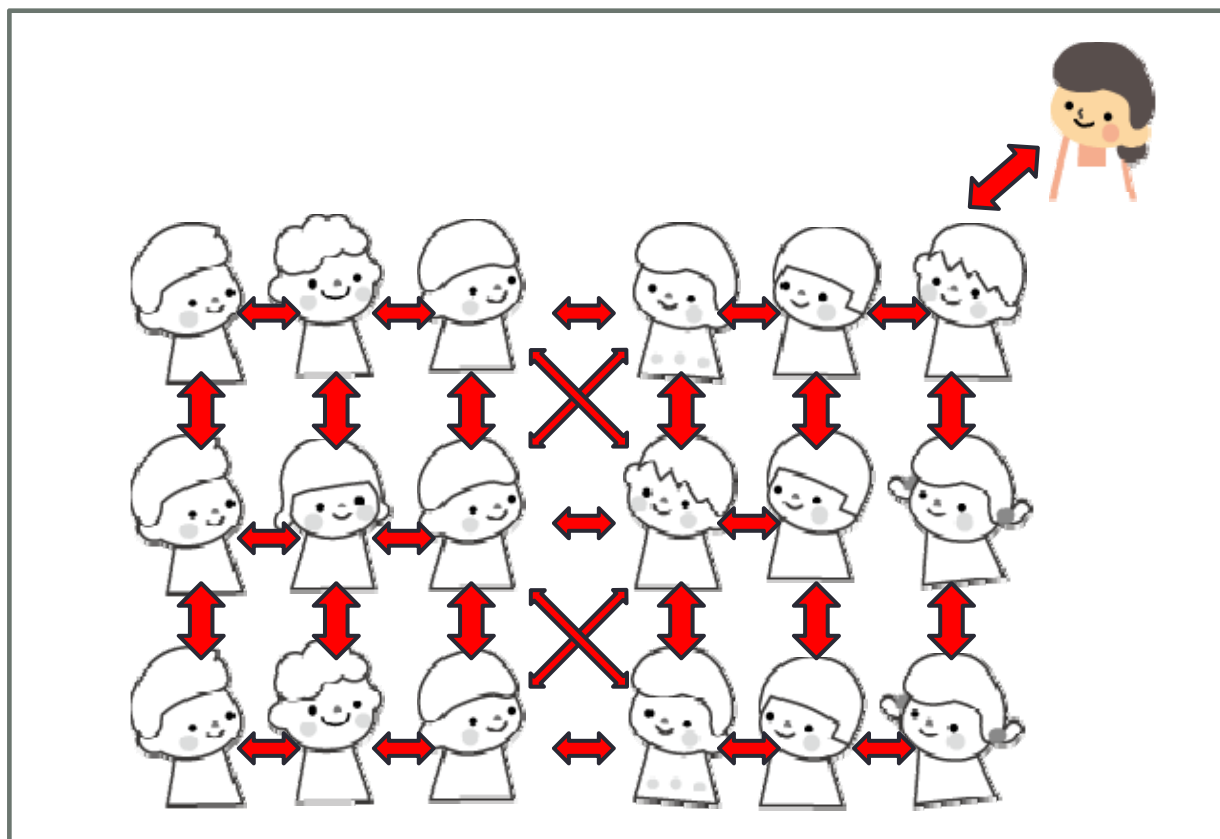
しかし教室は多様性のるつぼ

# コの字型 (聴き合う教室空間)

教師も  
聴き手  
の1人。

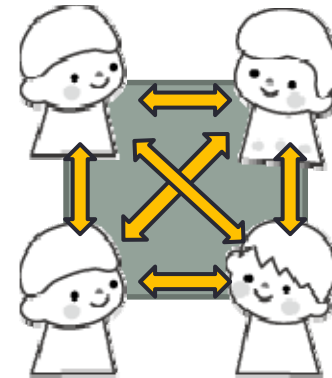
モニターしながら  
自分の考えを  
まとめてもよい。

友だちの説明を  
聴いてようやく納  
得する子どもも。  
ゆっくり考えなが  
ら聴けるから。



## 4人グループ（活用し合う小集団）

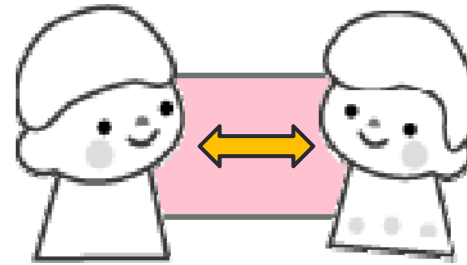
◇ 必要なときだけ  
他に働きかけて  
課題を解決する  
基本は個人作業



= 「グループ協同学習」

## ペア（学びを支え合うふたり）

- ◇ 友だちと一緒に学ぶことの楽しさや安心感を体験させる。（低学年）



- ◇ まずはパートナーといっしょに学ばせることを徹底的にしつける。



学び合う授業での  
教師の「居方」・「仕事」



◇ 教師は言葉を精選する  
落ち着いたトーンで語る

- 聴くことに重点をおく
- 聴き合う雰囲気づくり
- 子どもを見るゆとり

◇ 教師は視野を広く  
学べていない子どもは？  
いちばん支援が必要なのは？

- 子どものところに行き声をかける  
(私はあなたを見捨ててはいない)
- 「どこで困っているの？」
- 「おとなりに訊いてみたら？」

◇ 主な仕事は「聴く・つなぐ・もどす」  
困ったこと・わからないことに敏感に

- 困り感を共有  
「〇〇さんがここで悩んでいる。みんなで考えてみようよ。」
- 発言をクラスにもどしてみる  
「〇〇さんは・・・と言っているけど。だれかつながる人はいますか。」

## ◇ 先頭と最後尾を視野に

- 一番できる子どもが学んでいるか
- 一番困難な子どもも学んでいるか
- どんな課題なら両者が学べるか
- どんなシステムなら両者が学べるか

## ◇ 「わからない」に価値を与える

- 「よくわからない，まだ納得できない，ということが大切なんだよ。」
- 「〇〇さんの疑問から解決の糸口がつかめたね。〇〇さんありがとう。」

## ◇ 協同が必要かどうか見極める

- 個人作業の協同化  
「グループにして、必要なら友だちに訊いてもいいよ」
- 少しむずかしい課題への挑戦  
「グループになって知恵を出し合っていていいよ」
- ペア学習  
「となりの人と一緒に考えてもいいよ」

## ◇ 「聴き合うこと」を大切にする

- 「〇〇さんの考えを聴いてみよう」
- 「自分の考えと比べながら聴こう」
- 「話し手は1人。他は聴き手です」
- 友だち（先生）に聴いてもらえた！  
（自分の居場所はこちらにある）
- 「静かに！」より「聴きましょう。」

◇ 時には、よく考えなければ  
できない課題を！

- 単元の最後からはじめてみる。  
「まだ習っていないけどやってみる？」
- 途中の問題からやらせてみる。  
「まずこの問題をやってみて」
- 教科書以外から  
「これはみんなには難しいかな・・・」



## 学び合いの「活動システム」

- (1) 挑戦したくなる課題の設定
- (2) モノを使った活動的な学び
- (3) ペア・男女混合4人グループ (主)
- (4) コの字の机配置 (従)
- (5) 「わからない」を授業の中心に
- (6) 学びの振り返りと学んだ意味の自覚

## 「学習観に基づく活動システム」であること

- 学び合いはマニュアルではありません。
- 「してよいこと、だめなこと」が決まっているのではなく「共有している学習観に沿って考えると、こうすることが有効ではないかな」と授業者が判断して授業をつくります。
- 当然，人によって授業に個性が表れます。
- 画一化ではなく，多様性を歓迎するのが学び合いの本来の姿です。



## おわりに

学び合いは、学校の経営方針や授業者の指導方針を実現するための考え方です。しかし、マニュアル化できないのも学び合いの特性です。理念に沿って、子どもを見て考えながら授業づくりを進めなければなりません。

授業でその先生の個性、児童の個性が発揮できるのも学び合いのよさです。どの児童にも学ばせるにはどうしたらよいか、お互いに授業を開き合って、実際の児童の姿から授業のあり方を探っていくことが学校づくりであり、教師として生きるということではないでしょうか。

